

## 幻影

高見正明

大きな屋根がとてつもなく高い鐵装工場の中は採光の天窓があつても薄暗かつた。轟々と音を立てる電動機やブレードを叩くハムマーの喧かましい響き、はては熔接や切斷のガスのスパークの眩しさなどで凡そ想像を絶する程焦立たしい刺戟が渦巻いてゐた。入口のところには水壓機があつて、今丁度一人の老工員がハンドルに手をかけたが、外を走つてゆく工員の姿を見とめると一寸振りむいた。入口からいくらかも離れてゐないトロの線の傍に四五人の工員がたかつて、倒れてゐる一人の工員を擔ぎ上げようとしてゐた。

「何だ喧嘩か？」

老工員はつぶやく様に言ふと表情も變へずにハンドルを廻した。

事はこうだつたのだ。その工員はまだ少年で——名は沼田良吉と云ふのだが——やはり同じ年頃の工員と二人で鐵板を運んでゐたのだが、丁度通りかゝつた若い女事務員をその工員がひやかしたので、工場に来て間もない彼にはそれが無性に穢らしいことに見えたのだつた。輕蔑した様な顔をして相手にもならずに通り返した女はその工員は後ろから下品な笑ひ聲を浴びせた。

「よしなよ。みつともねえ」

「お前なんぞ、そんな氣持ちや造船所はつとまらねえよ」

「女なんかをそんなに氣にしなくつたつて船は出來らあ」

「お前學校ちや優等生だつたんだらう」

その工員は嘲笑ひ乍ら急に持つてゐた鐵板を落した。良吉はとつさに手を放したのだが、何しろ思ひ掛けない事だつた

し、それに鐵板が重いのと調子を取り損つたので、不規則な弾みを起した鐵板は無雑作に彼の指をトロの線の上につぶしてしまつた。物も言はずにその場にしゃがみ込んでしまつた彼は眼の前が見えなくなつてゆく感じの中で、乾いた塵つばい路の上にポトポトと滴たる多量の血を見た。意識を取戻したときは彼は醫務室のベッドの中にあつた。煮え沸つてゐる湯の中に手を押しこまれてそれをどうしても抜くことが出来ないでもがいてゐる嫌な夢を見てゐた。そんな無意識の中で、眼の前が段々明るくなつて來たのを良吉は夜明だと思つて眼を開いた。醫務室の白い壁に窓越しに日がさし込んで、秋晚と云ふのに部屋の中は暖かつた。夜明だと思つたのはその明るい壁の反射だつた。看護婦がベッドの傍を離れた。向ふ側ではもう歸る仕度をして新聞を見てゐた醫者が立ち上つて一寸良吉の方を見乍ら出ていつた。

普段自分では氣が強いと思つてゐた良吉は氣絶したことが忌々しかつたが、それにもまして、工場に來てはじめての怪我で指を二本もつぶしてしまつたことがひどく彼を失望させ始めた。(左手で良かつた)と云ふ僅かな安堵の下から(けど一生涯不具なんだ)と云ふ決定されてしまつた運命の苛酷さを考へると身体中の血が又何處かにひいでゆく様な氣がした。サイレンが鳴り響いて工場全体を揺つてゐた騒音がピタリと止ると、大勢の人の足音が流れる様に窓の外をつゞいて、しばらくするとまた靜かにひつそりとなつた。良吉はじつとベッドの上に癡てゐるやうに壁に射してゐる陽の色が次第に黄色く變つてゆくのを見つめてゐた。左手は未だ熱っぽくつきつきと痛んだ。

漸く良吉が外に出たときは、もう通りは人通りも少くなつて、錆びた巨大な鐵骨に熟柿の様な夕陽の色が滴つてゐた。扉に沿つた道は舗装も悪く、凹んだ處には二三日前の雨が濁つたまゝまだ蒸發しきれずに、漣が立つてゐるその泥水の中には枯れ落ちた木の葉などが不潔に朽ち濡れてゐる。晩秋の風がオーバも着てゐない薄い葉服を垂して肌に見えて良吉は思はず肩をすぼめた。時々左手がひどく痛んで彼の顔を苦しげにひきつらせたが、それが痛まないときは曳きづつてゐる板襖の音が馬鹿に高く響いて良吉の心を物哀しいものへ誘つた。

「これつばつかしちや……」

良吉はそれでも昨日貰つたばかりなのでまだ大分ふくらんでゐる財布をポケットの中で握つた。さつき意識が返つて來たとき何も考へないで白い壁を見つめてゐた靜かさは何處かにいつてしまつて、寒い風に七人の裏町暮しを考へると怪我したことの不運さがつくづくと身に寄せるのだつた。運河の暗い汚れた臭ひが界限の朽されかゝつた様な家々に浸みこん

でそれ丈でも不健康なじめじめした生活、狭い家の中に親子が七人いぢけた様に暮してゐる恥かしさ、父親の喜一は一時はやはり鶴見の造船所に出てゐたこともあつたが、生來の怠け者でやがて解僱され、それから一向働きもせずそれでゐて近頃時々小金を持つてゐるのに氣付いて不審に思つたが、それが麻雀をやりに行つて取つてくる金だと知つたのはつい最近のことだつた。その癖母親のおユキの話では昔は喜一は小説などが随分好きだつたらしくて、彼がまだ造船所に出てゐたころは給料を貰ふとその何がしかを小説本を買ふのにさいてゐたそうである。そんな喜一の暮しに似合はぬ贅澤趣味——おユキはいつもそう言つてゐた——が良吉達の生活を一層苦しいものに追ひつめてしまつた。だからおユキは随分きりつめた生活を強いても見たが消極的なやり方では到底生計を潤すことは難がしかつた。彼は怪我がどれ位で働ける程度に癒るかは別として、いくらかの治療費を見込んで當分はまた家の暮しが詰つてくるのではないかと考へると足を運ぶことまでがおつくうになつた。

その日は鶴見の驛まで歩くのがいつもの倍以上もかゝる様な氣がした。驛についたときはもう薄暗くなつてゐて雑踏してゐた。待合室は人が一杯なので彼はホームのずつと終りの方にあるベンチに行つて、隅のところをよけて隠れる様に腰を下した。電車はなかなか來なくて夕方が遠慮もなく暮れていつた。

とげとげしく鋭敏になつてゐる神經が末端まで痛みを惹起して、機能を失つた様に他の方には働かなかつた。そしてそんな惨めな時に限つて良吉はいつもは氣にもならず済んで來た自分達の生活のすり切れた粗野な雰囲気考へこんだ。良吉は生活を蔑んだ。けれど物心のついたときはもうそんな運命を重く負はされてしまつてゐて、どうにもならない道を疲れ切つてするすると引張られてゆく丈だつた。彼はじつと塵つばい都會の暮れてゆく影を見つめてゐた。

「あんた怪我してるのね」

何時の間にか見知らない若い女が良吉の横に腰を下してゐた。

「造船所ね、わかるわ、そのマークで」

彼は馴れ馴れしく話しかけてくる女をしげしげと見返した。暗いホームの電燈の下では女のオーバの色もはつきりとは分らなかつたが地味な茶色らしいのをぬくぬくと着込んでゐた。どこか上品な服装をしてゐるのに、髪には勤め人の様にネットをかけてゐて、顔はもう長い勤めのせいとか疲れて焦衰してゐる様に白かつた。

「そんなに小さくなつてゐて、寒いと痛むんでせう。オーバを貸してあげるわ」

女は良吉を立たせるとオーバを脱いで後ろからかけた。

「いよ、オーバなんか」

實際良吉は女の外套などをかけられたのが氣恥しかつたし、第一大勢の人の眼を氣遣つた。「いよんだよ、オーバなんか」良吉は眞赤になつて小さな聲で呟いた。

「怖がらなくてもいよのよ」

心持ち青白い女の顔が良吉の顔をのぞき込む様に笑ひかけた。良吉は急に暖かいぬくもりが自体をつんでくる中で生れてはじめての柔らかな感じを味はつた。それは不思議な逃げることの出来ないものにしつかりと押へられてしまつた様な氣持だつた。腰をかけるとそのまゝ又黙つて煤けた暗い空を見た。

「どうして怪我なんかしたの」

「……………」

「え、あんた怖いね。怖がらなくてもいよわ」

「何でそんなにきくの。俺みたいに見すばらしい工員に……今まで可愛がられたことを知らない様な人間にさ……」

「でも、あんたはいよ人らしいわね。あんたの眼はもつと他のことで苦しんでたわ。あんたが怪我なんかしなくちやならない人ぢやないつてことがはつきり分るんだけど……きつと運が悪かつたのよ。ね、どうしたの」

「怪我つてものは人が良いからしないつてもんぢやないよ。喧嘩なんだ。つまりないことさ」

「喧嘩？ いけないわ。そんな亂暴なことしちゃ」

良吉は女があまりくどくどときくの無愛想に眞正面から見つめた。そして女の洋服の襟に小さく光つてゐるパツチが同じ造船所のものであるのに氣付いた。

「う、姉さんも鶴見なんだね」

「氣がついたのね。本社の方だわ」

女も良吉を見つめて笑つたが、寒いのか白い齒がカチカチと鳴つた。

「姉さん寒いんだらう。オーバは返すよ」

「いよのよ。あんたは怪我してるんだから」  
と云ひ乍ら首にまいてぬたマフラーをしめ直した。

「でも、どうして怪我する様な喧嘩をしたの。氣をつけなくちやいけないわ。工場はみんな亂暴な人ばかりだから」  
女のくどさが次第に今まで経験したこともない暖かな感情となつて良吉を包んでくる様に思つた。

「何でもないんだよ。一緒に働いてた奴が女をからかつたんで、それで喧嘩したんさ」

良吉のこわばつた心はときほぐされる様に今ではこの女に何もかも話してしまひ度い様な甘えた氣持に驅られた。

「で、あんたはきつとその人をとめたんでせう。そんなことしちやいけないつて、本當に造船所の工員つて嫌な男ばかり  
だわ。あたしなんか工場の方に出てくど何とかかんとかひやかされ通しだもの……今ちやもう馴れたけど、その變り優  
しさなんてすつかりどつかに忘れちやつた様な氣がするわ。あんたはまだ小さいけどあんな男になつちや駄目よ……  
今日も艦装工場のぞばであんたより小つちやなのが大人みたいな嫌なこと言つてひやかすもんだから……男つてものは  
どうしてあんなに卑しいんだらう」

「艦装工場の傍だつて……ちや姉さんだつたんだな」

「え？ ちやあんたはあたしのことか喧嘩したのね……。可哀想だわ」

漸く來た電車はひどく混んでゐた。女は良吉の傷が人に觸れない様に体でかばい乍ら「可哀想ね……。とぼつんと呟い  
た。肩を押しあふ様に乗り合はせてゐる近くの顔が二人の方を見た。良吉が女のオーバをかぶつてゐるのを見るとひそひ  
そと話したり、低い變な聲で笑つたりした。良吉は明る車室の中なのでそのことを意識すると顔がほてる様に恥かしかつ  
た。

「姉さん、オーバはいよよ」

「いよちやないの。あたし達が何してるつて言ふの。誰も何とも言へやしないわ。大人なんて周りの眼ばかり氣になつて  
何も出來ないんちやない？……女と男が一緒にゐるとすぐ變に好奇心を持つ様なのはかりちやない。あんた平氣にして  
いよのよ。平氣にしてなくちやいけないんだわ。」

女はガラスに映てゐる自分の暗い顔を穴のあく様にじつと見つめて動かなかつた。

「……人間つて……こんなに生きてるんたわ……」

女が又小さい聲で言つた。

良吉は何かひどく強いものがその女の細い身体の中にかくれてゐる様に感じた。そして今更に自分がかけてゐるオトプが重く肩を押しつづけるのを感じた。

「あたしは良い人が好きなんだわ。でもそんな人つて滅多に居ないのね。みんなあんた位るときにはもう悪くなつちやつてるのよ。綺麗な恰好してるのが金と女しか欲しくない様なのばかしなんだから、大人つてのは……女が欲しいつたつてそれも刺戟ばかりだわ」

「姉さん。何そんなに憤慨してらんだい。大きな聲でそんなことばかし言ふもんぢやないよ。」

良吉は傍を心配して女を肘で突ついた。

「あんたは良い人ね。でも、あたしにはそんな立派な男は來なかつたわ。無關心ぢや居られない癖して、それで眞面目に女に向へないのが男だつたのよ……。あんたは良い人だわ。お休みのときは遊びに來なくつて」

「だつて、姉さんそこには俺位の男はゐるんかい」

「いないわ。あんた位のともし下の妹が二人居るきり。」

「そいぢやとでも行けないや」

「どうして。あんた年のことや女ばかりなんてことを氣にしてらんだつたら、そんな心配は無駄よ。年なんか何でもないぢやない。家は叔父さんにきくとわかるわ。叔父さんはやつぱり造船所の醫務に出てるから」

女は電車を降りるとき「良い人はみんな集らなくちやいけないでわ。でないの良い人までが悪くされてしまふんだから。」と云ひ乍ら良吉の肩からオトプを外すとホームに立つて寒さうに襟を立てた。そして女の細い身体はすぐ人混みの中込まれて分らなくなつた。

良吉は女がゐなくなると急に解放された様に呼吸が樂になつた氣がしたが、それでも周りの人がみんな自分の方を見てゐる様で恥しさから身体中がねつとりと汗ばんで感じた。けれど電車が驛を出て走り出すと落ちついたせいか疾走する轍

の音が喧かしい中で不思議な淋しさを感じて（あの女は變つてるけど良い人に違ひないなあ）などとぼんやり思ひ乍ら女が残していつた暖かい感觸をなつかしんだ。そして急に自分達の暮しのことが浮ぶと女との奇妙な交渉がひどく貴いものに思へ出した。

櫻木町の高いホームからは横濱の街の灯がひろがつて見えた。ホームを吹き抜ける風が身体にからまつてゆく寒さの中で街の灯がチラチラと冷たく揺れた。（あの女は良い人なんだ。笑ふ方が間違つてるんだ。年なんかどうだつていゝぢやないかつて言つたな）良吉は一度味はつた暖かな人間愛がもう彼を家の中の荒れた寂しい空氣の中に閉ぢこもる様にして暮してゆくことを不可能にしてしまつたことを知つた。（遊びに行つて見よう）

良吉は寒い秋の夜に肩をすぼめて、運河に沿つた狭い路を歩いた。淀んだ河の不潔な臭ひが良吉の意識をいやでも現實にひきもどさずにはおかなかつた。ガタビシする格子をあけて入るときは又喧ましい喜一が怪我のことで何とか云ふに違ひないと思つた。

狭い家の中には父の姿は見えず、おユキは小さい子供を集めて晩飯を食べさせてゐた。

「えらい遅かつたぢやないか。おや、怪我したんだね。どうしたんだい、腕なんか吊つて……」  
部屋に入つて来た良吉を坐つたまゝ見上げながらおユキが言つた。

「どうするんだい。怪我なんかして来て」

良吉は黙つて塗りの剣げた髷の前に坐り込むと冷えた飯茶椀の上に頭を持つていつて不器用に飯をほゞばつた。おユキは心配やら不安やらで落着かず「ほんとは、父さんが眞面目ならこんなことはありやしないのに」とぶつぶつこぼし乍ら子供の口に匙で飯を入れてやつた。いつもならそんな母の心配をきくととても氣になつて一緒に減入りこんでしまふ良吉は、その日に限つてあの女のこと頭が一杯だつた。良吉も血を享けたのか工業學校時代から小説が好きで讀んでゐたが暮して追はれて近頃はそんな趣味も縁の遠いものになつてゐた。怪我をしたゝめにこゝ暫くは何も出来ないと思ふ諦も無意識にはあつたのだらうが、女の與へてくれた刺戟——暖い感情の蘇り——が久し振りに良吉の意欲を讀書に向けはじめた。良吉は飯をかきこみ乍ら父が三月程前に買つて来たゴリキーの全集を讀まうと思つた。喜一がそれを買つて来たときはおユキとの間に激しい言ひ争ひが起つたが、結局その本は二冊とも良吉の部屋のかもひの上に作られた粗末な手製

の棚の上に、彼が學校時代のぼろ／＼になつた教科書などと一緒に並べられた。大判の綺麗な装幀の本で背皮には金文字が押しあつた。良吉は以前からそれを讀まうと思つてゐたのだが暇がないのとあまり大冊なのでつい讀みそびれてしまつてゐた。

玄關の傍につけられた物置部屋の様な二疊が良吉の部屋だつた。良吉は飯が済むとすぐ自分の部屋に入つて棚の上に目をやつた。

(無S)

一目見た彼はその本が二冊ともなくなつてゐるのにすぐ氣付いた。他に本などをしまふ場所はなし、それに汚い教科書やノートと並んでゐた綺麗な本はあればすぐ分る筈であつた。

「母さん、小説は。ゴーストの」

おユキは隣の部屋でゴトゴトと後片付けをしてゐたが

「知るもんかね」

と突つけんどんに答へた。

「ほんとに知らないんかい」

「知らないよ……。父さんが大方賣つたんだらう。」

「何時頃。四五日前までは確かにあつたんだよ」

「うるさいね。どつちしたつてあんな本はない方が家の爲ぢやないか」

良吉はガツカリした。床をとつてもぐりこむと又女のことか思ひ出されて仲々寝つかれなかつた。

しばらくすると喜一が歸つて來た。良吉は自分の部屋の襖の前を通つてゆく足音を黙つて寢床の中で聞いた。戰爭中に取外された天井はまだ張られてゐないし、第一家が狭いので壁越しの二人の話は筒抜けだつた。

「あんたまた飲んだんだね」

「飲んで悪いんかよ。足もふらつかねえのにそんなに言はなくつたつていゝぢやねえか」

「第一何處に行つてたんだい。こんなに遅くまでさ」

「どこだつて今更何をきくんだ。お前は金さへやりや文句はねえだらう。歸つて来るすぐから亭主を捕へて何だよその挨拶は。飯でも食はせろ」

「ぢや又麻雀屋だね」

「今頃氣づいたんか。おい、今日は少えけど堪辨しな二百しか得がなかつた」  
喜一は急に聲を落した。

「二百だなんて水臭いね、一日中麻雀にいつて、…本賣つたんだらう」

「どうしてそんなこと言ふんだ」

「さつき良が探したけどないつてゐふからさ」

「おい、大きな聲するな。良が眼覺したらまづいぢやねえか」

「ぢや賣つたんだね」

「うん。だけど良には俺の友達に貸したんだつて言つどけよ。辻妻が合はねえとばれるからな」

良吉はすつかり聞いてしまつて本のはもう諦めるより仕方がないと思つた。それで又女の家に行くことなど考へてゐて、どうせゆくなら手の傷が癒つてからゆき度いし、そうしてゐると遍くなりそうにも思へたので、あの女の叔父とか云ふ醫者にみてもらつてどの位で癒るのかきいてみようなど考へてゐるうちに何時か眠つてしまつた。

翌日良吉は朝飯をすまずとすぐ工場に行つてみたが醫者は用事があるらしくて少し待つてゐたけど到々來なかつた。風が少し寒かつたが天氣は良かつたので良吉は醫務室でその醫者の家をきいて訪ねて見ることにした。良吉はあの女が自分の生活を生き生きとしたものにしてくれそうな氣がしたので一刻もはやく醫者に會つて傷の癒る豫測を知り度かつた。それにあとから氣付いたことだが昨日はあまり變つた女の態度に氣おくれしてすつかり聞くのを忘れてしまつた女の勤めてゐる課とか出来るならその部屋も知れたかつた。鶴見のホームでは昨日のベンチに腰かけて見た。すると昨日のことが實に現實離れをした夢の様にはつきりと思ひ出された。けれど十時頃の驛は極めて閑散で勿論あの女も現はれはしなかつた。

醫者の家は横濱の街もすつと先の杉田の方だつた。市電が海岸に沿つて走る頃は良吉は醫者がせめて二週間位で癒ると

言つてくれたらと思つた。醫者の家がある附近は住宅地で一寸小綺麗な家ばかりだつた。普段なら何も感ぜずに歩けるのにいざそのうちの一つを訪ねるとなると良吉は急に氣おくれがして唾をのみこむ様にして歩いた。

醫者の家の玄關に立つたときも良吉はいよいよ固くなつて呼び鈴を押すことさへ忘れて鏡の下りた扉をガチャつかせた若い女が出て来てガラス張りの戸を内側からあけてくれたときは全身が恥かしさでじつとりとなつた様な思ひだつた。

「あの、お醫者さんに會ひ度いですが」

吃り乍らやつとのことでこれ又言つた。女が良吉の名と來意をきいて廊下を向ふへ歩いてゆくのを、急に思ひついた様に「あ、あの會はなくつてもきいて貰へればそれでいゝんだけど」

と呼び返した。女は微笑し乍ら引返して來てもう一度名前と來意を確かめると突きあたりのドアを開けてその中に姿を消した。

良吉は又昨日の女の家もきいて貰ふのを忘れてしまつてゐるのに氣づいた。

女はしばらくすると又出て來た。

「あのお怪我の方は早くても二週間位はそのまゝにしておかなかちやいけないさうですけど」

「はあ」

良吉の妙に固くなつたぶつきら棒な返事が又女を笑はせかけたが

「あの沼田さんて仰しやいますと櫻木町の？」

ときいた。

「えー」

「ぢやお家にお歸りになつたらお父様にこのことを尋ねして下さいません」

「何を？　ぢやお醫者さんと家とは前から知つてたの」

良吉は糖一杯丁寧な言葉を使つて言つた。

「え、お父様もやはり造船所にゐたことがおありでその時からまゝ存じあげてるんですけどね。お尋ねするつていふのはもう三月ばかり前にお父様がいらつして子供が見たがつてゐるのが載つてゐるからしばらくお借りし度いつてゴォーリ

キーの全集を持つてらしたんですよ。でそれからずっとお見えにならないんですけど、その本が家のぢやなくて従妹のものなんでもんですからね」

「何冊？」

「二冊ですの」

「二冊？」

「ええ」

「どんな表紙の？」

「赤ですわ」

「……」

良吉はそのまゝ飛び出した。もう昨日の女の家をきくことなんかはとて出来なかつた。坂を海岸の方に下りてゆくと、き東京灣の灰色が鉛の様に重く眼に映つた。

(従妹つて言つたのがあの女なんだろう)

とか

(なんだ、盗坊の子なんか)

と云つた淋しい自嘲とかが秩序なくこみあげて來た。失望した足が重かつた。

(結局、俺みたいな運命——そうだ確かに運命だ——を負つて生れた者には、昨日の女は幻影に過ぎないのだ。だつて俺はあの女のを盗んだ人間の子ぢやないか)

良吉の胸に悲しい熱いものがみなぎつた。